

第13回中野総合学科新校（仮称）再編実施計画懇話会

日時：令和6年4月30日（火）

18時00分～19時30分

会場：中野市中央公民館 講堂

<次第>

1 開 会

2 挨拶

3 自己紹介

4 会議事項

（1）「第12回中野総合学科新校再編実施計画懇話会」まとめ

（2）再編実施基本計画について

（3）NSD（長野県スクールデザイン）プロジェクトについて

（4）地域共学共創コンソーシアム・統合方法について

（5）今後のスケジュールについて

5 その他

<次回の予定>

6 閉 会

中野総合学科新校 再編実施計画懇話会 構成員名簿

	区分	氏名 (○：座長)	所属等
1	自治体	竹内 敏昭	中野市 副市長
2		久保田 敦	山ノ内町 副町長
3		○柴本 豊	中野市教育委員会 教育長
4		竹内 延彦	山ノ内町教育委員会 教育長
5	産業界	藏谷 伸太郎	信州中野商工会議所 議員
6		黒井 悦子	山ノ内町商工会 女性部部长
7	同窓会	斉藤 武美	中野立志館高等学校同窓会 副会長
8		芦澤 孝幸	中野西高等学校同窓会 会長
9	PTA	笠原 広	中野立志館高等学校PTA 会長
10		青木 正実	中野西高等学校PTA 会長
11		荒井 健悟	中高PTA連合会 (中学校代表)
12		宮澤 昭雄	中高PTA連合会 (小学校代表)
13		寺島 重則	小布施中学校PTA 副会長
14	学校関係者	滝澤 崇	中野立志館高等学校 校長
15		森角 太一	中野立志館高等学校 教諭
16		堀内 和徳	中野西高等学校 校長
17		荒川 英子	中野西高等学校 教諭
18		大塚 秀樹	中野下高井校長会 会長 (南宮中学校)
19		渡邊 浩司	中野下高井校長会 副会長 (高丘小学校)
20		嶋田 和美	上高井郡・須坂市校長会 (小布施中学校)
21	学識経験者	大日方 悦夫	元県立高等学校長
22	地域	小池 広益	北信地域振興局 局長
23		小林 妙子	山ノ内町
24	生徒	佐藤 奏夢	中野立志館高等学校生徒会 会長
25		那須 文太	中野立志館高等学校生徒会 副会長
26		池田 愛美	中野立志館高等学校生徒会 副会長
27		小林 壱吹	中野西高等学校生徒会 会長
28		小山 莉奈	中野西高等学校生徒会 副会長
29		黒瀬 漣	中野西高等学校生徒会 副会長

事務局

中野立志館高等学校		中野西高等学校		高校再編推進室・施設係	
生田 憲克	教頭	小林 英司	教頭	井出 敦	主幹指導主事
森角 太一		宮尾 久枝		貝野 宗司	主事 (施設係)
小林 ちひろ		島田 味知子		山崎 巖	主任指導主事
清水 潔		佐藤 拓哉		宮嶋 直美	主任指導主事
阿部 佳代子		荒川 英子			

第12回 中野総合学科新校(仮称)再編実施計画懇話会まとめ(案)

日時	令和5年(2023年)10月17日(火曜日)18時00分～19時00分		
場所	北信合同庁舎講堂		
出席 (敬称略)	竹内敏昭、久保田敦、柴本豊、竹内延彦、藏谷伸太郎、黒井悦子、芦澤孝幸、笠原広、横田善二、外山雄一、湯本将平、金澤きみ枝、滝澤崇、森角太一、弓削弥生、黒岩徳治、田中和幸、大日方悦夫、小池広益、小林妙子、滝澤漣、山田真綾、久保山ルリ、西澤水涼 (以上24名)		
欠席 (敬称略)	斉藤武美、川本修一、武居真穂 (以上3名)	傍聴者	5名 マスコミ3社
事務局	中野立志館高校	生田教頭(事務局長)、西澤教諭、湯本教諭、阿部教諭、森角教諭	
	中野西高校	小林教頭(副事務局長)、荒井教諭、島田教諭	
	県教育委員会	宮澤室長、堀田企画幹、柳澤主幹指導主事、山崎主任指導主事	
当日資料	次第、第11回懇話会まとめ、校地検討会議資料、再編実施基本計画(案)		

会議事項

- (1) 第11回懇話会まとめ
- (2) 第9回校地検討会議の報告
- (3) 再編実施基本計画について

全体討議概要(要旨) (⇒: 質問・意見等 →: 教育委員会回答等)

- (1) 第11回懇話会まとめ
⇒ 意見なし
- (2) 第9回校地検討会議の報告
 - 県事務局から、校地選定の検討過程、選定理由の説明と、検討の結果「中野総合学科新校(仮称)は中野立志館高校の校地、校舎を活用する」と判断したことを報告
 - 竹内校地検討部会長から、県事務局の校地選定結果報告について議論の結果、校地検討会議で了承したことを報告
⇒ 意見なし
- (3) 再編実施基本計画について
 - 県事務局から、前回懇話会および本日の校地検討結果を踏まえ、新たに「3活用する校地」「5学びのイメージ」を記載したことを報告
⇒ 施設整備について、整備に要する期間について6年程度を想定とあるが、開校前と考えてよいか。
→ 開校前に間に合うようにしたい。新校開校時には新たな学校で学ぶことができると考えている。
 - 今後の予定について
 - ・ 再編実施基本計画については県教育委員会でも検討を行い、文言の修正等を行うことがある。
 - ・ 今後、県教育委員会定例会での決定を経て、県議会に付議する。
 - ・ 再編実施基本計画の県教育委員会定例会での決定等については、その都度報告をする予定。
 - 校地の跡地利用について
⇒ 今後、中野西高校の跡地利用はどのように検討していくのか。また、そこに中野市も入るのか。
→ 跡地利用については、県の知事部局内のワーキンググループで検討していく。現在は、何らかの学びの場にしていきたいと考えている。ワーキンググループのメンバー自体は県の機関から選ばれているが、地元の市町村をはじめ地元の方々のご意見を聞きながら決定していく。開校年度までには跡地利用についても決定していきたい。
 - 高校生徒会長の感想
新しい学校をつくる過程で、生徒の生の声を新しい学校に反映できてよかった。
今年卒業してしまうため直接関わるわけではないが、7年後の自分たちの高校がどうなっているか、皆さんの考えを聞くことができたり、自分たちの考えを伝えることができたりしてよかった。

その他

【次回】

第13回懇話会については、期日等の調整が済み次第、開催通知にてご案内する。

中野総合学科新校（仮称）再編実施基本計画

1 再編統合対象校

中野立志館高等学校、中野西高等学校

2 募集開始（開校）年度

令和 12 年度

今後両校の学校規模の縮小化が避けられない状況の中、できるだけ早期の統合が必要であることと、施設の整備期間等を考慮し、令和 12 年度を新校の募集開始年度とする。

3 活用する校地・校舎

中野立志館高等学校

「新校で構想する学び」の実現を第一に考え、学びを支える施設・設備等の学習環境、隣接施設の有用性の観点から中野立志館高等学校の校地・校舎を活用する。

4 設置課程・学科及び開校時に想定する募集学級数

全日制課程 総合学科 7～8 学級程度

定時制課程 普通科 1 学級

※学科の名称は、今後編成する教育課程等に基づき、開校前年度に決定する。

※新校開校時の募集学級数は、毎年度定める「長野県立高等学校生徒募集定員」により開校前年度に決定する。

総合学科のシステムを使いながら、持続可能な社会づくりの担い手を育てていくための多彩な教科・科目を開設する。

募集学級数は、旧第 2 通学区の中学校卒業予定者数の推移や現在の募集学級数から、新校の開校年度には 7～8 学級程度が想定される。

現在の中野立志館高等学校定時制は、中野総合学科新校に移管する。

5 学びのイメージ

別紙のとおり

中野立志館高等学校の総合学科、中野西高等学校のユネスコスクール^{注1}の学びを継承し、ユネスコスクールの中心的な学びである ESD（持続可能な開発のための教育）^{注2}をベースにグローバルな人材育成を目指す、地域全体を学びのフィールドとした地域の学びの拠点となる総合学科高校を構想する。

注1)ユネスコスクール：ASPnet(UNESCO Associated Schools Project Network)

・ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校

注2)ESD(Education for Sustainable Development)：持続可能な開発のための教育

・人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できる社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動

6 施設整備

新校の学びに必要な施設設備及び、高校施設の著しい老朽化と社会や学びの変化に対応し質的向上を図っていく。

・施設整備に要する期間 6 年程度を想定

未来に挑戦するための総合学科高校

目指す学校	○挑戦	様々なことに挑戦し、失敗しても粘り強く取り組む力を育む
	○創造	自己と他者を見つめ、社会と積極的に関わりを持ち、変化に柔軟に対応できる創造力を育む
	○協働	地域から世界まで、幅広い視野を持ち、他者と協働し未来社会に貢献できる人を育てる

総合学科×ESD(持続可能な開発のための教育)

- キャリアデザイン
- 多彩な科目
- 探究学習・ESD

○多様な進路希望に対応できる教育課程

- 自分だけの時間割を作成
 - ・キャリアデザイン・ライフデザインに繋がる多彩な系列(科目群)から自由に選択
 - ・大学進学に特化した科目選択も可能
- バラエティーに富んだ学び(系列=科目群)
 - ・普通科目(国語、数学、外国語、芸術等)と専門科目(工業、商業、農業、家庭等)に加え、デジタル(AI、ロボット)、福祉、観光等の現代的な課題にアプローチする学び

○自分の「好き」や「強み」を究める学びを卒業単位として認定

- 単位制の自由度を活かした学校外の様々な取組などを単位認定
 - ・ボランティア活動や長期インターンシップ等の体験的な学び
 - ・英検・漢検などの各種資格取得
 - ・長期・短期の海外留学
 - ・大学生や地域の方とともに取り組む自主的な探究活動
- オンラインの活用等による学び
 - ・大学の講義の受講(先取り履修)、専門学校での体験的な授業や他の高校の授業の履修

○環境、地域の課題や国際理解について地域と協働して取り組むESD

- 地域全体を学びのフィールドとした学習活動
 - ・多様性受容力を高め、学びを深めるための地域共学共創コンソーシアムとの連携(地域の人などを外部講師として活用した授業、地域と協働したフィールドワーク等)
- 異文化理解を深めるための海外との交流や海外留学への支援
 - ・国内外のユネスコスクールとの交流やESD協働学習
 - ・国内外の姉妹校との交流
 - ・地域の教育資源(観光等)を活用した国際交流
 - ・地球規模の課題(平和、貧困・格差等)に取り組むための学校が独自に設定する科目
 - ・信州つばさプロジェクトの積極活用

地域共学共創コンソーシアム



ユネスコスクール



【中野立志館高校の定時制課程は中野総合学科新校に移管】

Nagano School Design プロジェクト ～中野総合学科新校～

みんなで作る未来の学校
「学校づくり-ひとづくり-地域づくり」

高校教育課
高校再編推進室

1

NSDプロジェクトとは【これまでの経過と理念】

施設の老朽化を考慮しつつ、必要な学校施設の整備を行う

1950年 文部省（現文部科学省）・日本建築学会
「鉄筋コンクリート造校舎の標準設計」を作成



長野県の県立学校でも、似たつくりの校舎が多数存在

この70年ほどの間に社会は大きく変化



**「学び」や「学び方」の変化に伴い、学校の「つくり」や「つくり方」を見直し
これからの時代 これからの学びにふさわしい学校空間の整備**

教室棟（1968年建設）

2

県立学校学習空間デザイン検討委員会

最終報告書「長野県スクールデザイン2020」（2020年8月）

これからの時代：変化が激しく予想困難な時代

1 どんな時代や状況にも対応できる、フレキシブルな空間

これからの学び：主体的な学び、探究的な学び／個別最適な学び、協働的な学び

2 いろいろな学び・さまざまな人数 → 多様性をもつ学びの空間

学習空間の捉え直し：生徒・教職員・地域にとって必要な要素を包含した施設

3 「学習」・「生活」・「執務」・「共創」という4つの要素に整理

空間の「質」：子どもたちが生き活きと過ごす空間

4 機能性と快適性、空間の「重ね使い」、屋外とのつながり、家具などの重要性

地域と共生する学校：地域にとってのかけがえのない拠点施設

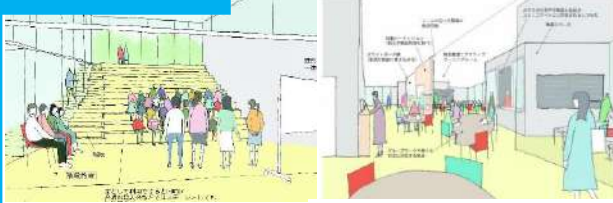
5 県の多様な自然環境・地域性を考慮、地域施設との連携や役割の分担を検討

3

県立学校学習空間デザイン検討委員会

最終報告書「長野県スクールデザイン2020」（2020年8月）

学習空間



階段教室とフレキシブルホール

FLA
(フレキシブルラーニングエリア)

生活空間



ラウンジ・ロッカー

執務空間



大職員室

共創空間



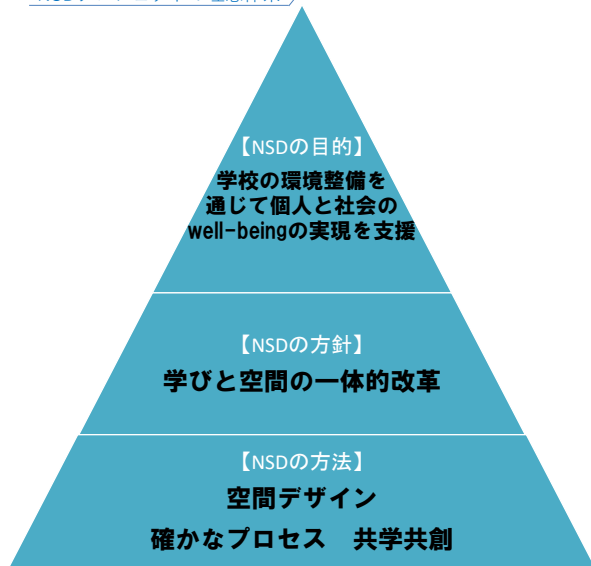
地域連携協働室

4

NSDプロジェクト

「学校づくり・ひとづくり・地域づくり」

NSDプロジェクトの理念体系



【NSDの目的】

『学校の環境整備を通じて 個人と社会のwell-beingの実現を支援』

長野県教育委員会が目指しているのは、『個人と社会のwell-beingの実現』すなわち、一人一人の多様な幸せとよりよい社会の実現。

NSDは、多様な価値観を持つ誰もが、激変する予測不能な社会の中でも柔軟に対応しながらよりよく生きていけるために、学びの質の向上と学び続ける個人と社会を支援していきます。

【NSDの方針】

『学びと空間の一体的改革』

NSDは、学びの質の向上と学び続ける個人と社会を支援するため、一人一人の多様な教育的ニーズに応える学びと空間の一体的な改革を進めていきます。

空間については、児童生徒や教員がいきいきと活動でき、地域の方々にとっても学びや交流の拠点となる豊かな空間を整備していきます。

【NSDの方法】

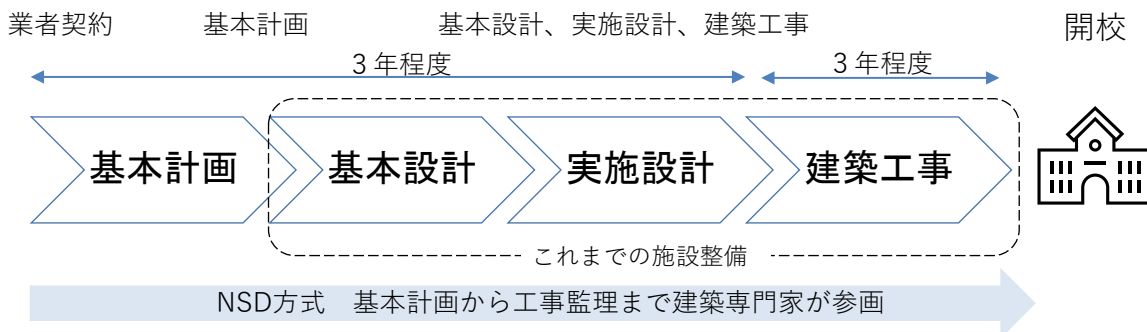
『空間デザイン』『確かなプロセス』『共学共創』

「長野スクールデザイン2020」の提言をもとに空間デザインを行いつつ、また、ワークショップ等を通して、建築専門家と使用者となる学校や地域が意見交換を行い、使用者や建築専門家が基本計画の策定から関わるプロセスを大事にしていきます。

NSDを通して学校と地域が共に学び、新しい社会を共に創る、これからの時代にふさわしい学校づくりのプロジェクトを進めていきます。

5

施設整備のスケジュール（おおまかな予定）



これまでの施設整備

- ・基本計画について、県教委及び営繕部局で策定（画一的な施設整備）
- ・基本設計から建築専門家が参画（意見の反映できる幅がせまい）

NSDの施設整備

- ・基本計画から建築専門家が参画し、生徒、教員、地域と意見交換を重ねながら策定

生徒、教員、地域の意見を設計に反映しやすいプロセス！

6

ガラス展示棚の作品越しに、
中の作業風景が見える

NSDプロジェクト 各新校の進捗の様子はこちら

長野県ホームページより【URL】

https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/nsd/nsd_toppage.html



県立学校学習空間デザイン検討委員会 最終報告書「長野県スクールデザイン2020」はこちら

長野県ホームページより

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/koko/dezain/toppage.html>



「想い」や「考え」を「かたち」にするために、
実際にプロダクト（制作物）に具現化

議論などを通じて目ざす
手を動かしながら試行
何かを創造するための「実験やワークショップ」等を
備えた「クリエイティブラボ」

2-1 既存校舎をつなぎ補う配置計画

C 東側配置

新校舎は既存校舎をつなぐように南北にのびる配置とし、既存校舎/新校舎間で回遊動線をつくり、3科が融合するような関係性をつくります。また新校舎は地下1階をグランドレベルに、2階を既存校舎2階に合わせて、1階レベルをピロティとして開放することで、**既存校舎、その周囲の屋外空間、擁壁で分断されているグランドの関係を再構築します**

新校舎と新第二体育館・第一体育館を2Fレベルでブリッジでつなぐことで既存校舎からスムーズな移動が可能になります

演奏会や送迎等の駐車スペースが十分確保できます

南北に長い新校舎は、地域連携協働室や部室、音楽科諸室、発表やイベントに使える大階段など、生徒と市民の活動の**モノとコトが堆積していく**ような場所となります

グランドと既存校舎をつなぐ大階段により、現状南北両端にしかない昇降の不便を解消し、かつ発表等の学習形態にも利用できることで活動の幅を広げることができます



新校舎弓道場や新体育館は木造架構を検討し軽量化を図ります

新校舎の屋上に小諸の風景を望むことができるテラスをつくります



コモロピロティと庭
四季を通じて入学式、文化祭、体育祭、小商祭、定期コンサートやその準備が行われる新校の舞台となります

既存校舎の棟間の屋外空間からの抜けを確保しつつ拡張して、することで、屋外空間を介して校舎間の関係を再構築します。

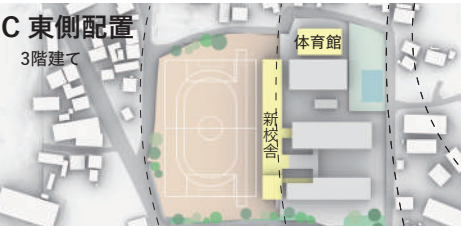
地域連携協働室を南端に配置することで、市民の南側からのアプローチがスムーズになります



- 広い平面形が取れるため教室配置計画に柔軟性がある
- グランドに影が落ちない
- 南面採光が可能
- ×解体完了後の着工となるため工期がかかる
- ×解体完了後の着工となるため部活に影響がでる
- ×既存管理棟や昇降口からの距離が遠い
- ×既存校舎との接点が限定的
- ×既存校舎の改修計画と関係が希薄になる
- ×地域連携協働室は街に対して遠くなる
- ×近隣住宅への圧迫感や音の影響が大きい
- ×サッカーコートが公式サイズより小さくなる



- 解体を待たずに着工できるため工期が短縮
- 広い平面形が取れるため教室配置計画に柔軟性がある
- 地域連携協働室は街に対して近く配置できる
- 南面採光が可能
- ×解体完了後の着工となるため工期がかかる
- ×既存校舎との接点が限定的
- ×南側アプローチに対して圧迫感がある
- ×既存校舎の改修計画と関係が希薄になる
- ×第一・第二体育館との動線が長くなる
- ×近隣住宅への圧迫感や音の影響が大きい
- ×サッカーコートが公式サイズより小さくなる
- ×グランドに比較的に長く影が落ちる



- 独立して建つ既存校舎と体育館をつなぐ配置となるため、3科のみならず活動全体を一体的に計画できる
- 将来的な既存校舎建替えに際しても今回の形式を継承できる
- 既存校舎間の屋外空間を生かした改修と一体的な計画が可能
- サッカーコートが公式サイズで計画できる
- 浅間山/千曲川/棚田など街を構成する自然地形に沿った風景に位置づく配置である
- 既存各棟を動線的につなぐ形式のためバリアフリー化の検討も対応可能
- △一部着工が第二体育館の解体後になる(工期への影響は限定的)



南北に長い新校舎は、学校と街の活動によるモノやコトが堆積していく軸となり、雄大なランドスケープに対してアクティビティがファサードになっていきます。



地域連携協働室から大階段を通じて、昇降口、さらに上部にある音楽ホールへと動線につながります。1階のコモロピロティでは、共創の場としてさまざまな活動が展開されます。

部室や市民も使えるロッカー、掲示板、演奏の練習だけでなく地域連携協働室と連続的に使用できる大階段やスタジオなど、新たな学内の活動を新校舎を軸に展開することで、**さまざまな活動の痕跡はこのエリアに堆積していきます**



学内活動も街の活動も、生活や発表や研究といった諸活動として融合していく、その拠点になります。



既存校舎間にあった屋外空間はうまく学内外活動に利用できているとは言い難いのが現状です。新校舎や特別教室と合わせてこれらの屋外空間の性格付けを行います

特別教室を1階に集約して、市民とともに学べるゾーンとします。また、食堂(定時利用)と調理室はまとめてアクティブ・ラーニング・ルームとして運用しつつ食の庭とつなげ、クリエイティブラボは創造の庭とつなげるなど屋内外の機能の連携を強化する配置です

平面計画:
既存校舎の片廊下・中廊下の標準設計による教室配置形式に対して、南北に廊下を持つシンプルな平面形状の新校舎を接続させることで、回遊性のある校内動線に改修・改善することができます。標準設計による校舎増改築の汎用性のある手法となります。



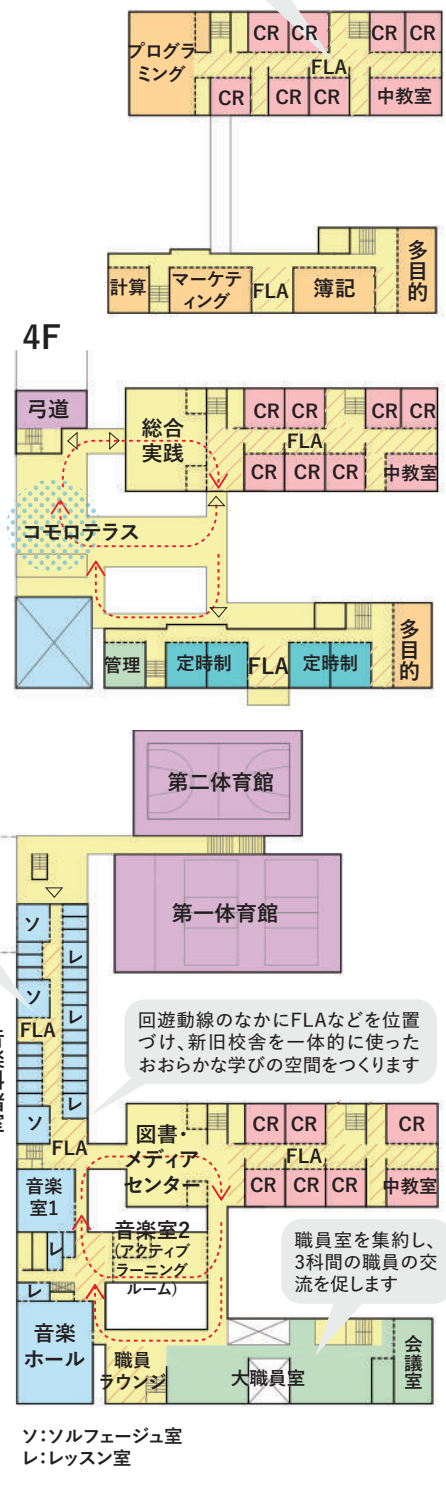
図書・メディアセンターに隣接するFLAは、3科の回遊動線上にあるため、可動の本棚を持ち込むことが可能で、調査や研究などの共同プロジェクトの運動性が高い配置になっています。



地域連携協働室やグランドとの結びつきが改善された既存校舎間の各庭を望む回遊動線は、3科と街の融合が象徴的に現れる場所となります。

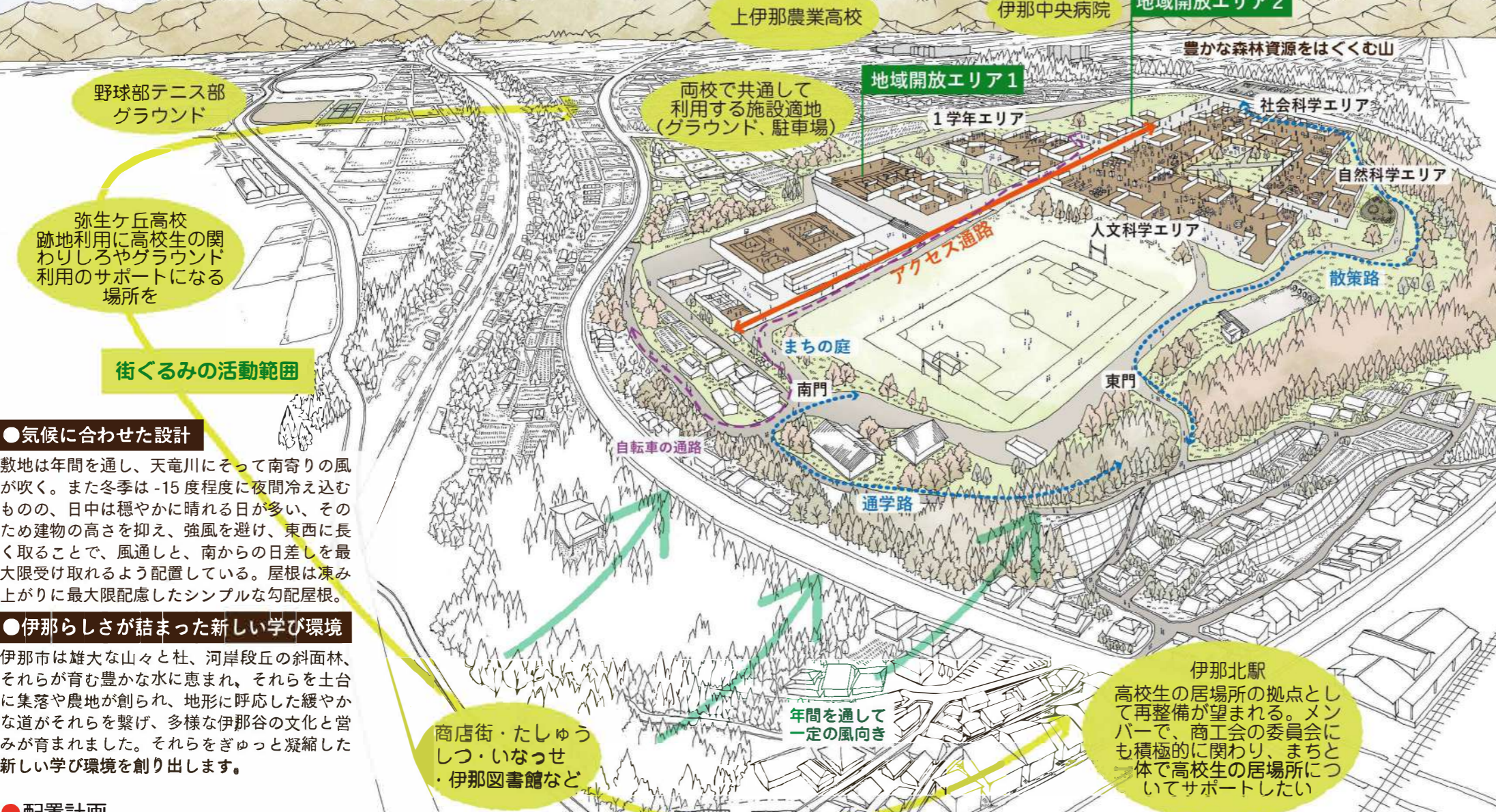
小諸新校 プロポーザル時点

既存教室数は今後3科のカリキュラムで決定していくことになっていますが、廊下幅を十分拡張し、FLAとして多様な学びができるように整備します



1.敷地条件等への建築的アプローチ

上伊那地域への深い理解「はじめにこどもありき」
— 真の上伊那共学共創コンソーシアムを目指して —



野球部テニス部
グラウンド

弥生ヶ丘高校
跡地に高校生の関
わりしるやグラウンド
利用のサポートになる
場所を

街ぐるみの活動範囲

●気候に合わせた設計

敷地は年間を通し、天竜川にそって南寄りの風が吹く。また冬季は-15度程度に夜間冷え込むものの、日中は穏やかに晴れる日が多い、そのため建物の高さを抑え、強風を避け、東西に長く取ることで、風通しと、南からの日差しを最大限受け取れるよう配置している。屋根は凍み上がりに最大限配慮したシンプルな勾配屋根。

●伊那らしさが詰まった新しい学び環境

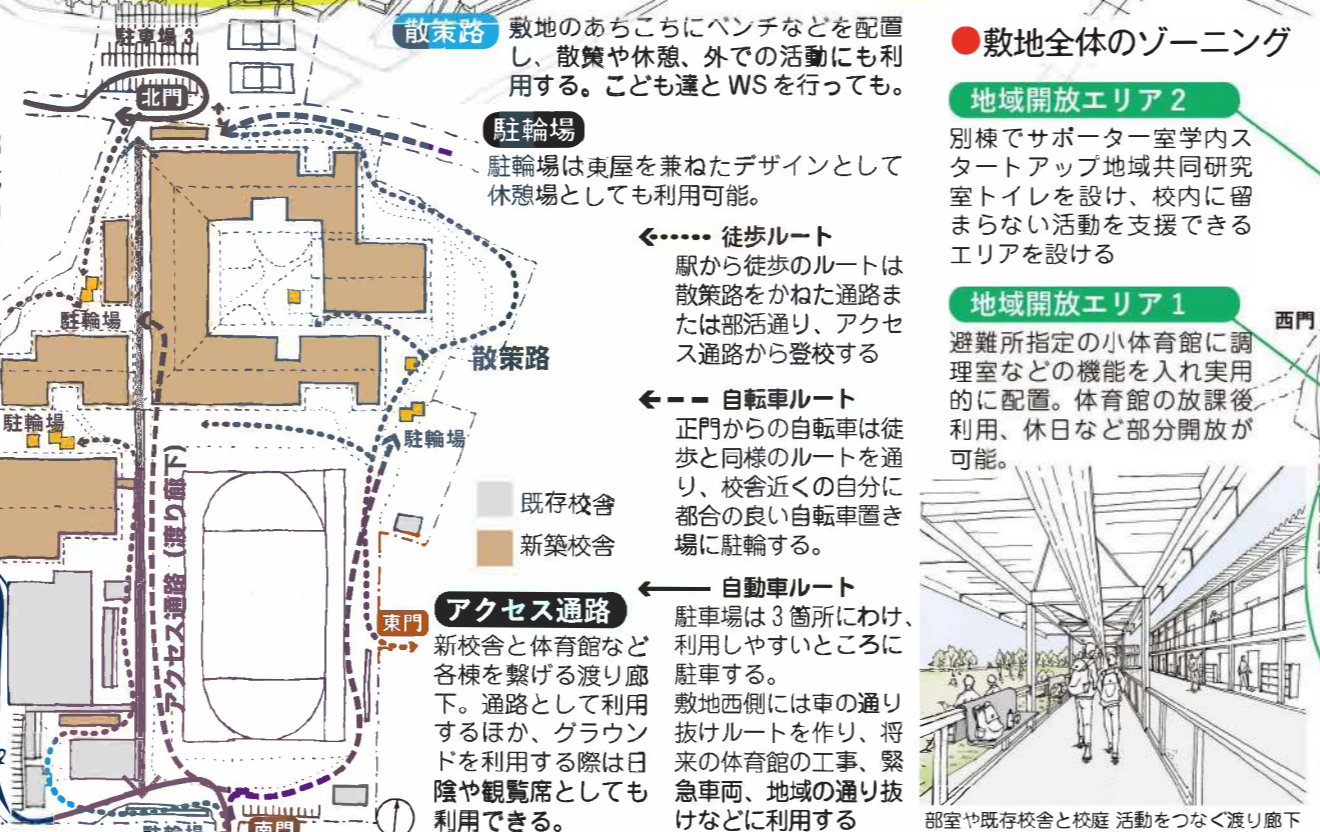
伊那市は雄大な山々と杜、河岸段丘の斜面林、それらが育む豊かな水に恵まれ、それらを土台に集落や農地が創られ、地形に呼応した緩やかな道がそれらを繋ぎ、多様な伊那谷の文化と営みが育まれました。それらをぎゅっと凝縮した新しい学び環境を創り出します。

●配置計画

既存建物を併せ持つ敷地の北側グラウンド部分に平屋で新校舎を配置した。既存校舎の解体後にグラウンドを整備する。新校舎周辺には多様な通路や外部空間を整備し、外部や半外部の空間と室内を自由に利用できる。平屋の建物は将来の2次利用や増減築がしやすく、アメーバのように、これからの検討事項に柔軟に対応できる。また、平屋はエレベーターが不要なのでどんな人でも使いやすい。学校全体に面的に広がる平屋の計画はこども達が自ら居場所を見つけ出し、多様な活動と偶発的に出会うことを可能とする案がこれからの学びを創る計画にふさわしい。一方、校門から校舎までの距離が遠くなるが、南北に通路を直線を通し、自転車や徒歩でダイレクトにアクセスできるように整備する他、主な駐車場を北側敷地に想定し、新校舎へのアクセスを結び直し、自主性を育む自由なアクセスとも矛盾しない。アクセス通路に面して、運動を中心とした「アクティブエリア」、避難所や地域利用もしやすい、「芸術と暮らしエリア」を配置している。建設後の野球部とテニス部は弥生ヶ丘グラウンドをソフトテニス部は敷地北側のテニスコートを利用する。

●アクセスと既存校舎

高校生の1日が自由に組み立てられるアクセス
正門を中心とした歴史ある伊那北高校の付まいから、東西南北に門を設け主体的な行動で自由に過ごせることに最大限配慮した自由なアクセスへ変更をしている。こども達の安全は地域で見守る文化の上伊那だからこそ取り入れられる提案。南門付近には地域の子も連れながらも気軽に散歩に来られるようにまちの中に不足している小さなポケットパーク「まちの庭」を設け、学校を一周する散策路も。いろいろな世代の地域の人に関わることで、高校そのものをまちの一部として捉え直している。



敷地のあちこちにベンチなどを配置し、散策や休憩、外での活動にも利用する。こども達とWSを行っても。

駐輪場
駐輪場は東屋を兼ねたデザインとして休憩場としても利用可能。

徒歩ルート
駅から徒歩のルートは散策路をかねた通路または部活通り、アクセス通路から登校する

自転車ルート
正門からの自転車は徒歩と同様のルートを通り、校舎近くの自分に都合の良い自転車置き場に駐輪する。

自動車ルート
駐車場は3箇所にわけ、利用しやすいところに駐車する。敷地西側には車の通り抜けルートを作り、将来の体育館の工事、緊急車両、地域の通り抜けなどに利用する

アクセス通路
新校舎と体育館など各棟を繋げる渡り廊下。通路として利用するほか、グラウンドを利用する際は日陰や観覧席としても利用できる。

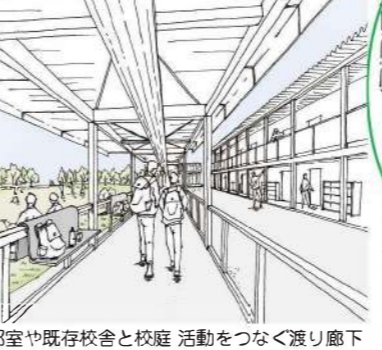
●敷地全体のゾーニング

地域開放エリア2

別棟でサポーター室学内スタートアップ地域共同研究室トイレを設け、校内に留まらない活動を支援できるエリアを設ける

地域開放エリア1

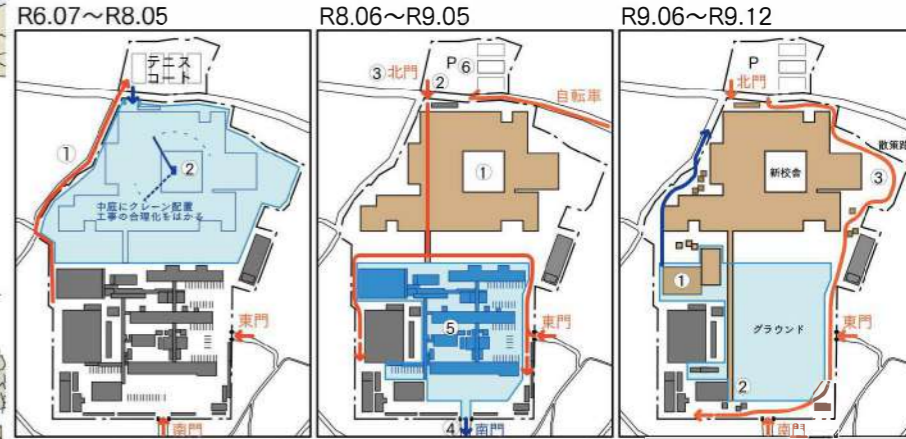
避難所指定の小体育館に調理室などの機能を入れ実用的に配置。体育館の放課後利用、休日など部分開放が可能。



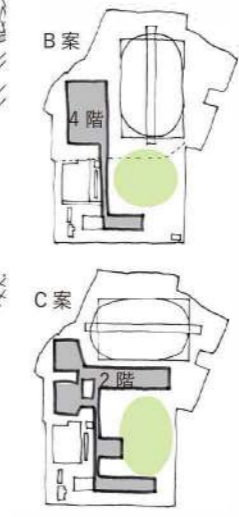
部室や既存校舎と校庭 活動をつなぐ渡り廊下

●建替計画

工事中の生徒の環境を考慮しプレファブを建てずに工事範囲が生活範囲と交差しないよう建替を計画する。木造平家建てのため工事騒音は最小限。



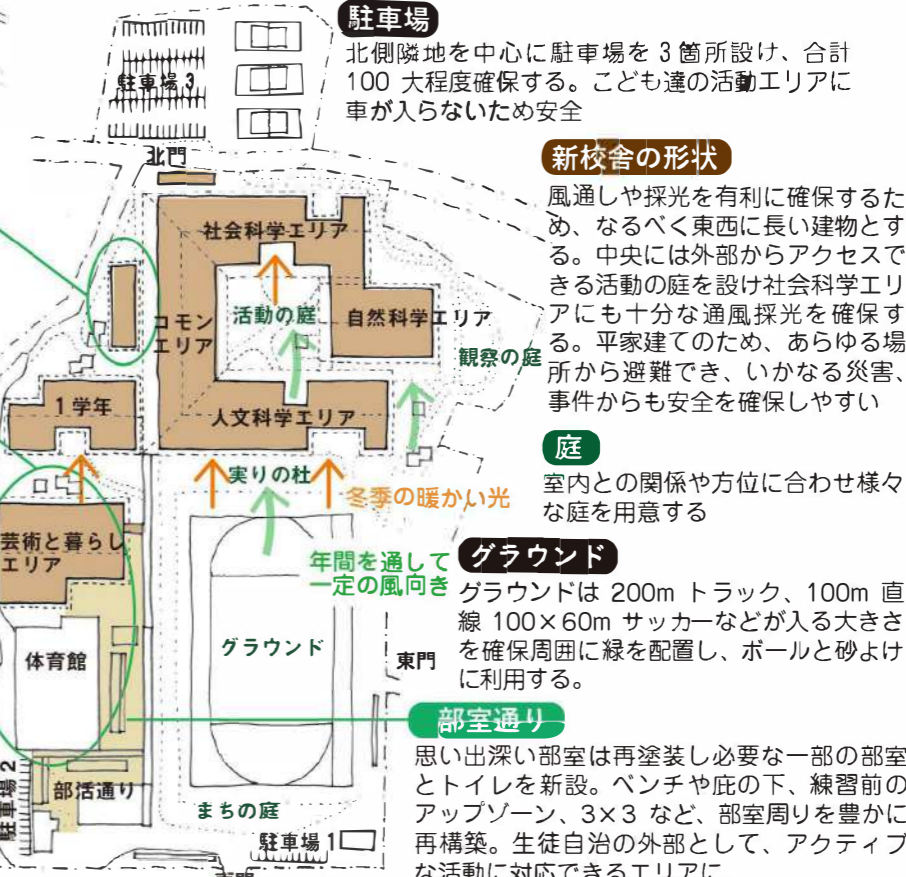
- [フェーズ1 新校舎建設時]
 - 西側道路をテニスコート動線とする
 - 新校舎本体建設、中庭を活かした建方
 - [フェーズ2 既存校舎解体時]
 - 新校舎本体完成
 - 北門を設置する
 - 北門を学生、職員、自転車の動線とする
 - 南門を警備員を配置し工事車両動線
 - 既存校舎の解体撤去
 - テニスコートと駐車場に変更
 - [フェーズ3 全体完成時]
 - 新小体育館撤去完成
 - 新渡り廊下完成
 - グラウンド、外周散策路完成
- ※植栽工事は冬季を避けてR10.04以降
※アスベスト調査により期間短縮あり



その他の配置案

B案は解体一本体と工事エリアを限定できるため、工程管理がしやすく、十分な広さのグラウンドを確保できる置計画である。一方で生徒の活動場所が新校舎内で完結し、内外の広がりが生じにくい。また、耐火建築物となるためコスト増となる。
C案は複数の校舎を分散配置させるもので大体育館等との近接した関係や、内外の活動の連続性を作れることを可能とするが隙間での工事工程となるため、安全確保や工期に懸念が生じる。校舎ボリュームが細長くなるため廊下状の動線が多くなり、避難やバリアフリー上の措置が必要となる。

- A案 ●全体延床面積 12,825m²程度 ●木造平屋 ●別棟扱いによるその他建築物(耐火性能)



駐車場
北側隣地を中心に駐車場を3箇所設け、合計100大程度確保する。こども達の活動エリアに車が入らないため安全

新校舎の形状

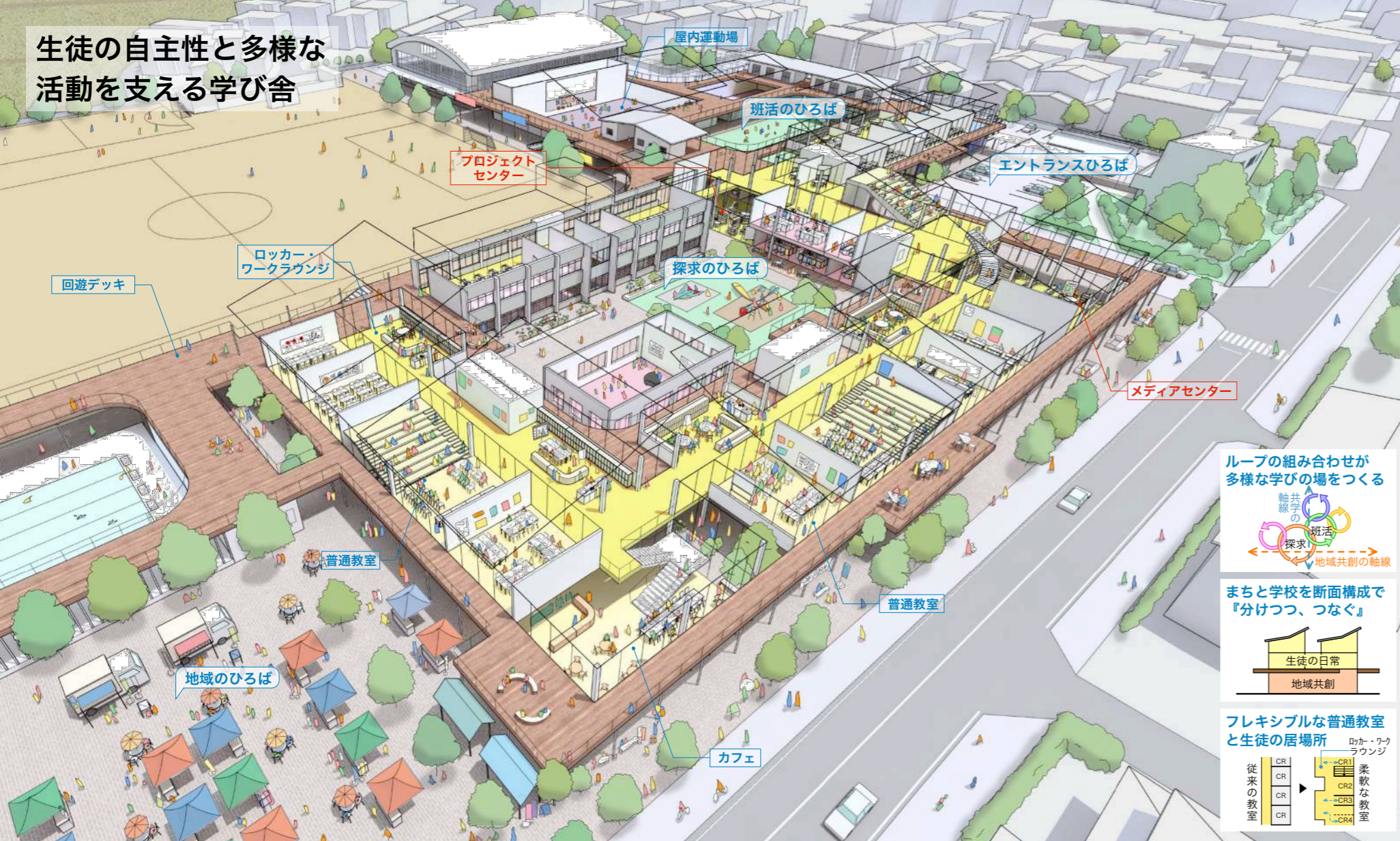
風通しや採光を有利に確保するため、なるべく東西に長い建物とする。中央には外部からアクセスできる活動の庭を設け社会科学エリアにも十分な通風採光を確保する。平家建てのため、あらゆる場所から避難でき、いかなる災害、事件からも安全を確保しやすい

庭
室内との関係や方位に合わせ様々な庭を用意する

グラウンド
グラウンドは200mトラック、100m直線100×60mサッカーなどが入る大きさを確保周囲に緑を配置し、ボールと砂よけに利用する。

部室通り
思い出深い部室は再塗装し必要な一部の部室とトイレを新設。ベンチや庇の下、練習前のアップゾーン、3×3など、部室周りを豊かに再構築。生徒自治の外部として、アクティブな活動に対応できるエリアに。

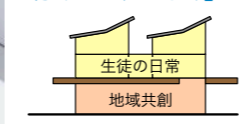
生徒の自主性と多様な活動を支える学び舎



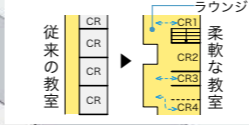
ループの組み合わせが多様な学びの場をつくる



まちと学校を断面構成で『分けつつ、つなぐ』



フレキシブルな普通教室と生徒の居場所



●まち全体への「学びの広がり」を実現する校舎配置
 ・「共学共創」空間が通りに面して地域に開かれ、休日や放課後にも探究活動が可能な配置計画を検討します。地域と共に学ぶ学校です。
 ・老朽化著しい既存建物は除却、活用可能な建物は存置します。

凡例	A: 北側建築案 (1段階整備)			B: 南西側建築案 (1段階整備)			C: 南東建築案 (2段階整備)		
	1期工事	2期工事	「共学共創」空間	1期工事	2期工事	「共学共創」空間	1期工事	2期工事	「共学共創」空間
配置検討案	[Plan A]			[Plan B]			[Plan C]		
計画概要	①既存棟を全て残り運動場に新校舎を建設 ②校舎棟を解体し跡地を運動場として整備 ※仮校舎は不要			①既存棟を一部解体し、南西側に新校舎を建設 ②教室棟を解体しロケリ、運動場2を整備 ※仮校舎は不要			①既存棟を一部解体し、南西側に新校舎の一部と仮校舎を建設 ②教室棟を解体し、新校舎の一部と屋内運動場、武道場等を建設		
A	◎除却は最小限で、整備面積が小さい			△既存棟を追加除却、整備面積は増加			△老朽化著しい棟を除却、整備面積は増加		
B	×共学共創空間が南側道路から遠い			×既存建物との距離が遠く、配置が散漫			◎南側道路に面し、既存棟との連携が容易		
C	×車動線と運動場が近接、駐車場が困難			◎広いロケリが確保できる			◎学校と送迎、定時制等の車動線が分離可能		
D	×面積が狭く住宅に近い			×面積が狭く、運動施設のみとまりがない			◎既存同等の広さで、まとまりが良い		
E	△工事中に運動場はないが工期短縮が可能			△工事中に屋内運動場、武道場等がない			△工事中に屋内運動場、武道場等がない		

敷地内で学校機能を維持する工程計画

- ・工事中に敷地内で野沢北高校が継続可能な工程計画を検討します。
- ・段階的整備と近隣施設の活用により仮校舎を最小化し、コストを抑制します。
- ・工事範囲を明確に区分することで、工事中の安全性確保に留意します。

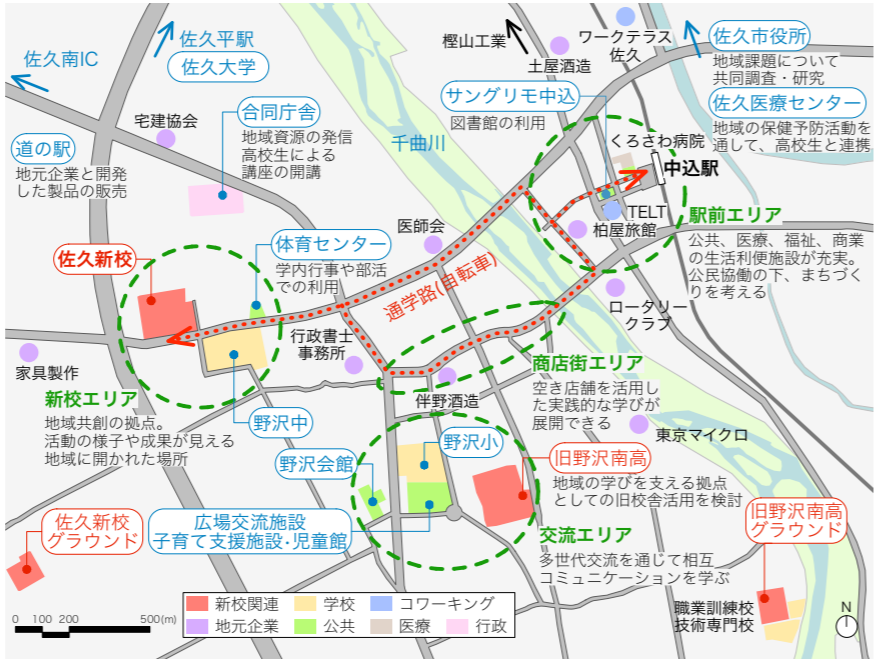
【フェーズ1】
 想定15ヶ月 (R8.4~R9.7)
 ・屋内運動場、武道場、プール、部室等を解体
 ・プール、普通教室(20室)+地域連携等を建設
 ・仮校舎(管理+特別教室)を建設

【フェーズ2】
 想定18ヶ月 (R9.9~R11.3)
 ・③、④部室等を解体
 ・普通教室(8室)+特別教室+管理、屋内運動場、武道場、合宿所等を建設
 ・①を改修
 ・工事完了後仮校舎を解体

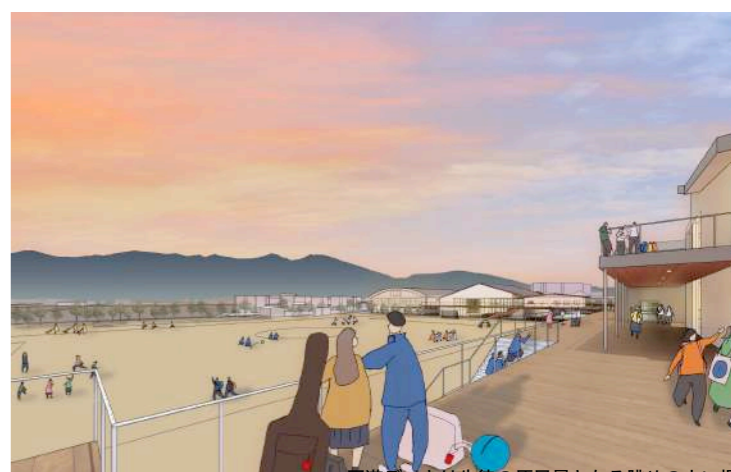
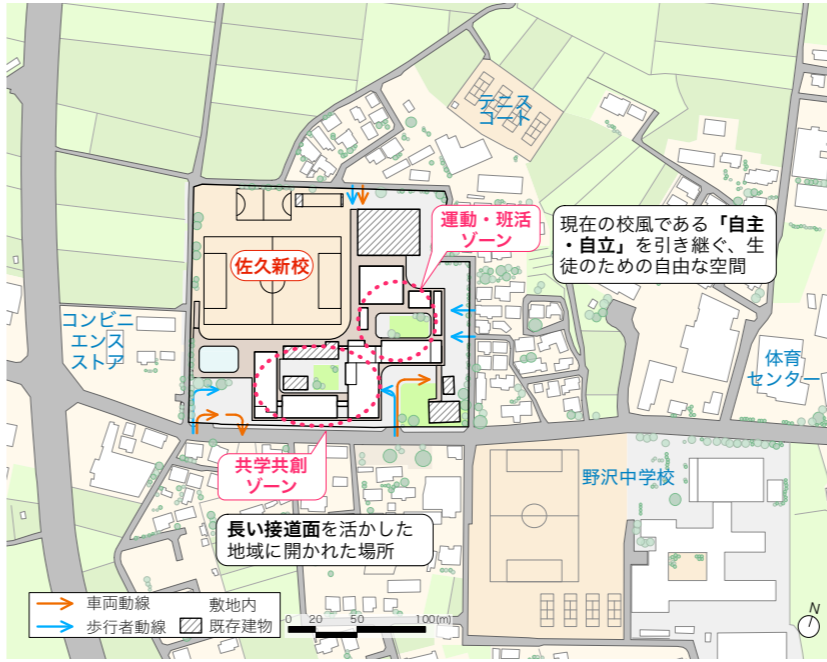
※工事期間中の屋内運動場、武道場、プール機能は野沢南高校及び近隣施設の活用を検討することで対応

①敷地条件への建築的アプローチ ■佐久新校が地域とつながり、佐久らしさ・野沢らしさを活かした新しいまちをつくる

- 野沢エリアをウォークラブルなまちに再生する
 - ・佐久市の良好な気候や風景、子育てや教育への高い意識を活かした新校を構想します。
 - ・新幹線駅を中心として発展する佐久平・岩村田エリアに対し、野沢エリアは『ウォークラブルなまち』に再生することを目標とします。
- 探究的な学びにより「まち全体」が学びのフィールドになる
 - ・佐久新校では探究学習を通して、校内に留まらず地域の様々な場所に学びを展開します。新校がまちづくりの拠点となります。
 - ・地元企業や行政、教育機関や医療機関が新校の学びに参加することで、より実践的、学際的な学びが実現します。日本や世界で活躍すると同時に、地域に資する人材を育てます。

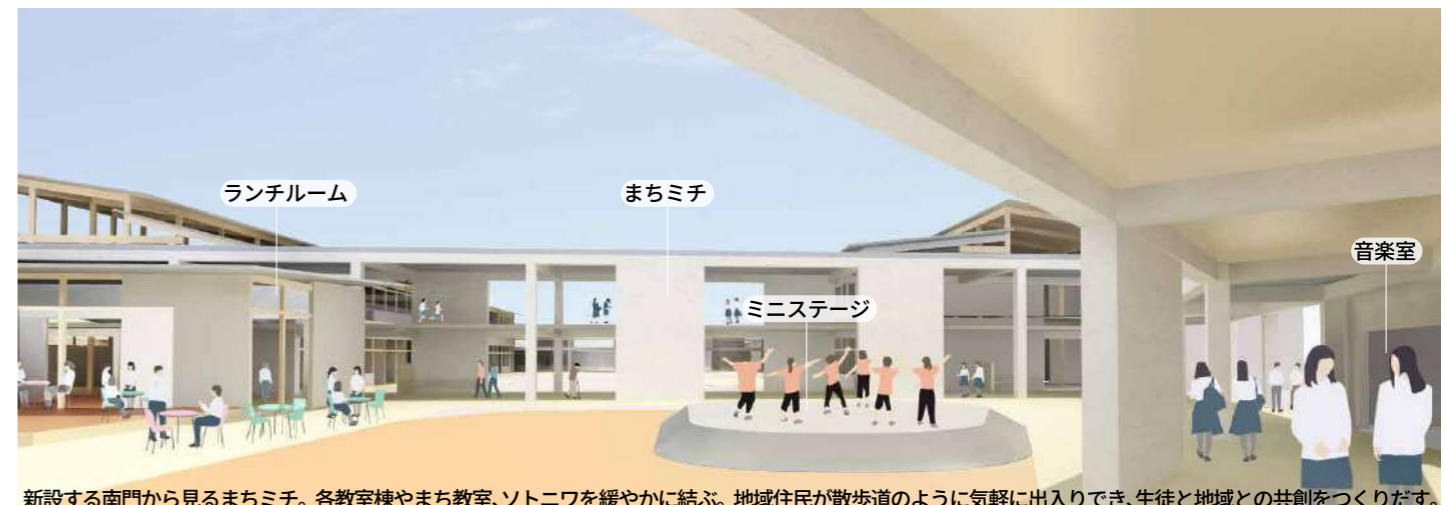
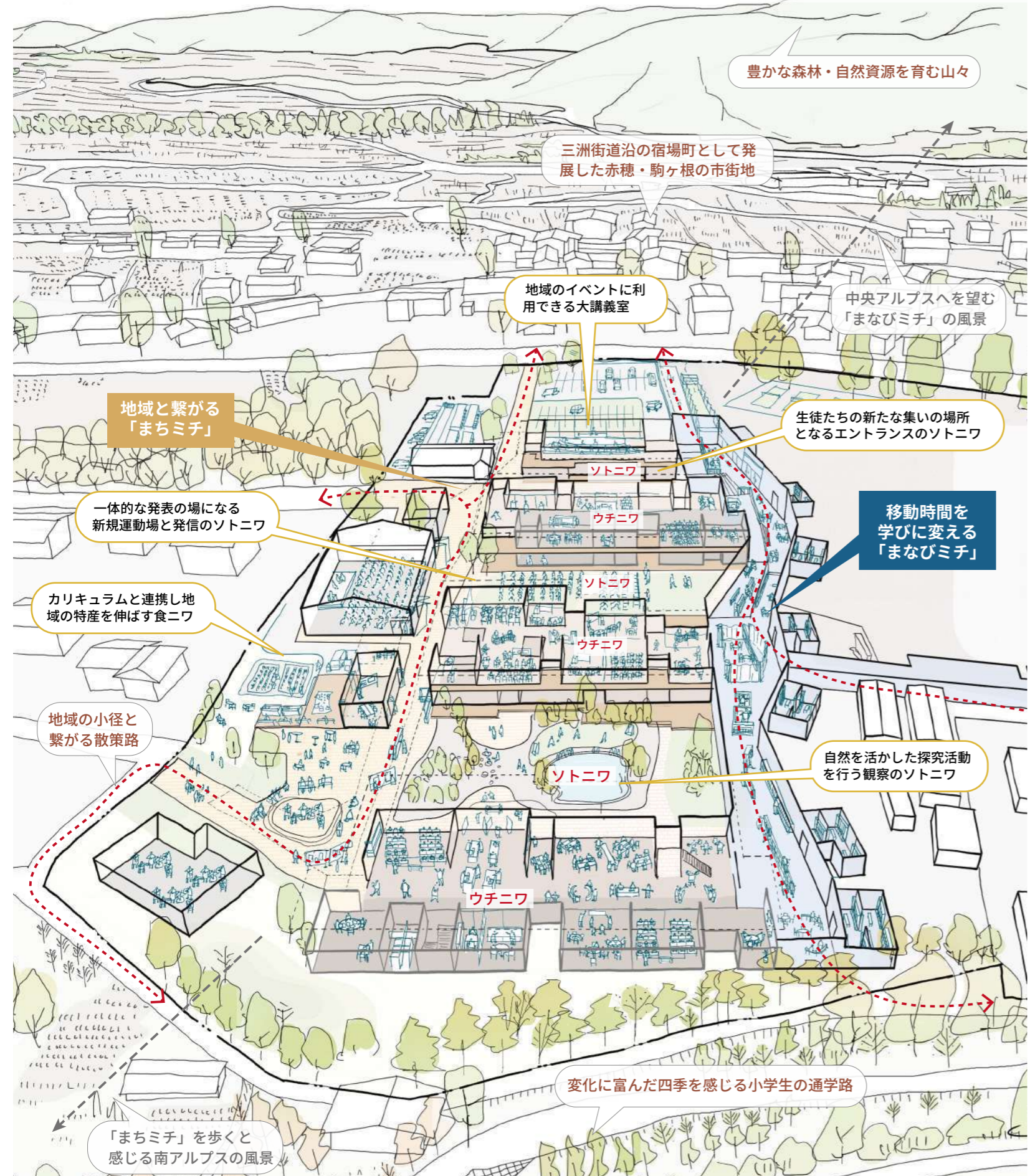


- 地域への接続と生徒の活動の場が両立する敷地利用計画
 - ・敷地の接道長さを活かし、通りに開かれた建築とします。歩行者が学校の様子を感じられる、歩きたくなる道をつくります。
 - ・来校者がアクセスしやすい位置に『共学共創ゾーン』を配置します。生徒の自主的な活動の場となる『運動・班活ゾーン』はその奥に配置し、落ち着いた生徒の生活空間を確保します。



“まち”と“まなび”のふたつのミチが織りなす学びの循環

中央アルプスと南アルプスに囲まれた自然豊かな街に建つ赤穂総合学科新校は、まちの風土や文化、産業の学びを通じて、これからの多様かつ共生の時代を生き抜く総合的な人間形成の場になることが期待されます。そこで、私たちは歴史ある三洲街道を継承し、“まち”と“まなび”のふたつのミチを通すことで、地域社会とのローカルなつながりと時間や場所を超えたグローバルな学びの両方を併せ持つ学校をつくります。その両者が関係し合い、学びの循環を生むことで、赤穂独自の新しい総合高校を目指します。



地域の小径を拡張する2本のミチ

赤穂南小学校の通学路を構成する小径を拡張し、赤穂新校に“まちミチ”と“まなびミチ”を引き込むことで、まちミチでは小中学生を含む住民と生徒の活動の共有、まなびミチでは学習と生活や部活動など、有機的な繋がりをつくります。



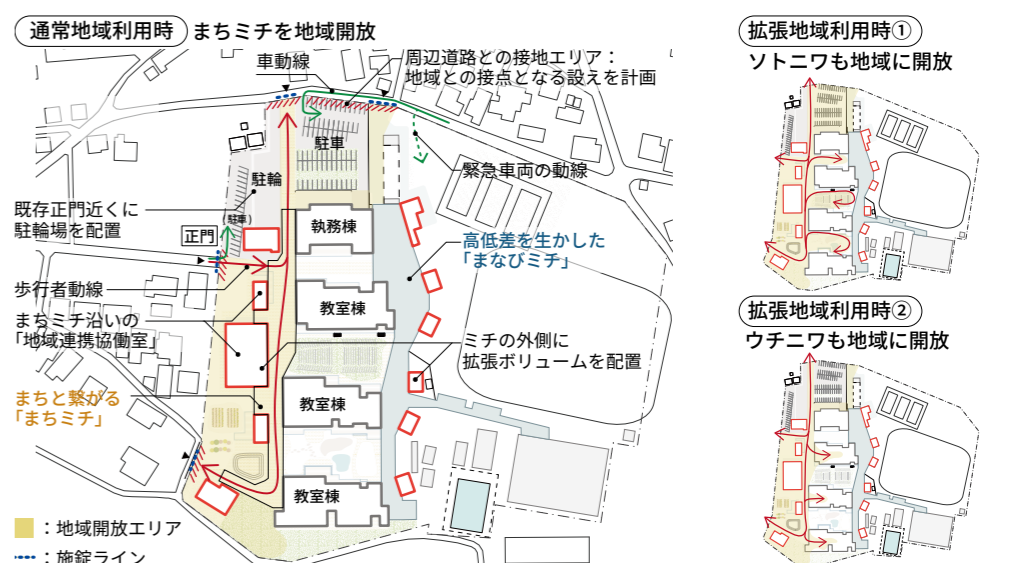
既存建物に考慮した配置案の検討

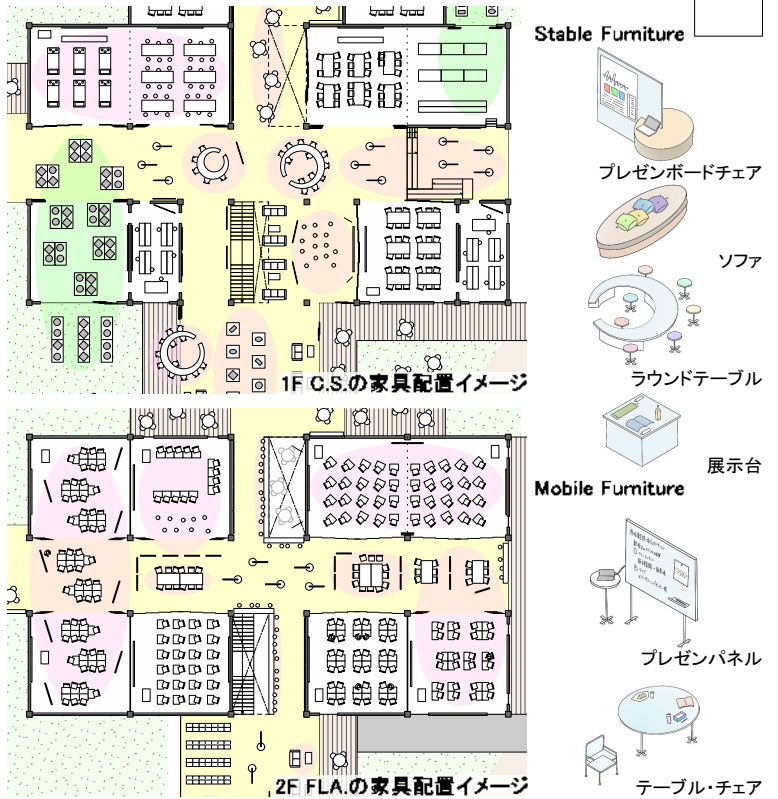
既存建物に考慮をしながら、可能性としての3つの配置パターンを検討しました。周辺の街並みへの連続性や、教室棟への方位を踏まえた採光通風の状況から、パターンAの分棟接続案が最良と考えています。

案	○A案 平行配置	○B案 中央集中	○C案 口の字
快適性	○各棟へ通風・採光が可能	○各棟へ通風・採光が可能	×新築部の西日が課題
動線	×各棟が離れている	×各棟が離れている	○室がまとまっている
屋外空間	○教室と広場が近接する	×教室と広場が離れている	○中庭を活用できる
木造	○容易	△少し困難	△少し困難
階数	○2階建て	×3階建て（階高低い）	○2階建て
建替え	○棟ごとの建替えが可能	×規模が大きいため困難	×各棟が近いため困難
まち並み	○周辺に配慮したスケール	×周辺に対して大規模	×周辺に対して大規模

周辺環境と敷地条件に配慮した配置計画

- 教室や大講義室を4つのボリュームに分節してその両端を東西のミチで繋ぎ、さらに周辺へと関係を拡張するボリュームをミチの外側に配置します。
- 高低差を多く含むこの敷地では、周辺道路と接地する箇所に地域との接点を設けるとともに、敷地内の高低差を吸収したミチの設計を行います。
- 歩車の動線を明確にゾーニングします。
- まちミチを地域開放の拠点としながら、行事によってはソトニワでもイベントを共有するような、まちと共にある高校を目指します。

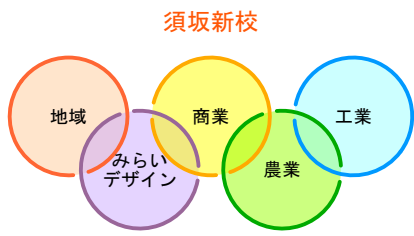




OpenCampusとしての須坂新校

私たちの提案の骨子は以下の3つです。

- ① 4つの異なる分野(みらいデザイン科、農業科、商業科、工業科)がただ融合するのではなく、お互いの良さを活かしながら、**協同しかつ学年を超えた活動が出来る環境**を育むこと。
- ② 地域(周辺企業、商店街、住民、農家、NPO法人など)と学校がイベント時(園芸祭など)だけでなく、**日常的に交流できる場所**を新校の内部に確保すること、**まちづくりとして学生がまち中に出ていく仕組み**の創造。
- ③ 広い敷地や既存の地形や樹木、庭園や庭を活かした、**大きなランドスケープ**としての学校計画。風土・気候など、須坂の自然を満遍なく享受し、**オープンキャンパス**としての新しい高校像の提案。



特殊なプログラムと敷地形状を最大限活かした配置計画

既存庭のポテンシャルを活かしそれらを取り込んだ校舎配置とし、平面と外構、植栽計画が一体となって**内部と外部が連続した豊かな学び**が行える計画です。駐車場は3カ所にまとめ体育館利用(地域開放も考慮)職員、来校者が分かりやすい計画です。一般車の動線をグラウンド周りに限定することで**生徒の安全性を確保**します。

C案は、4学科の融合が計れるように生徒の居場所が数珠繋ぎのように連続し校舎全体がまとまった配置計画です。2階建てとすることで上下階の移動が容易かつ学科間の連携が取れ、中廊下の北側教室にも採光が確保できます。地域の歴史や街並みに寄り添った**蔵型の建物形状**と地域に溶け込んだ愛着の持てる形状です。

	既存活用(改修)	A案(ハート型・3階建・片廊下)	B案(口の字型・3階建・片廊下)	採用 C案(蔵型・2階建・中廊下)
学科間の融合	△	○	○	◎
FLA(廊下と教室の関係)	△	△	△	◎
建物の付まい	△	△	△	◎
外部との関係	△	△	△	◎
空間の抜け	○	△	△	◎

NSDにふさわしい須坂新校独特の学習空間

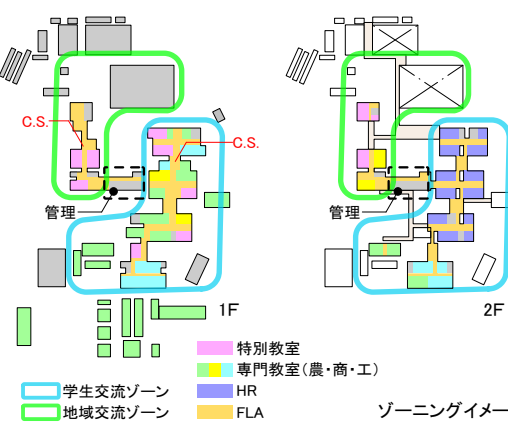
・Walkable town 須坂

須坂の街を歩くと、観光地ではなくとも、かつての蔵屋敷や空き家、また路面を改修し街並み保存が進んでいて、**歩いて楽しい風景**が広がります。また周辺の山々を抱く風景は自然に近く、緩やかな坂道は須坂独特のまちな風景を育んできました。まち中を歩くのにちょうど良いスケールであることが分かります。わたしたちは須坂新校をこうしたwalkable townの中核と位置づけ、現在まち中で起こっている諸問題を須坂新校の高校生と一緒に考え、かつては賑わっていた“ショッピングセンター”や“駅前商店街”など、**高校生のアイデアで企業や地域の方とまちおこしを行う方法を模索**します。小布施や善光寺といった観光名所とは一味違った、高校生によるまちの整えかたプロジェクトとして、この須坂新校建設プログラムを位置づけ、高校生の本気を見せたいと思います。



・須坂カリキュラム

須坂新校の特徴の一つに下の表のように分野ごと、学年ごとに学習教室が変わることで学校の中をかなり歩く(移動する)ことが挙げられます。こうした授業のカリキュラムを活かして、私たちは無理なく地域や異分野の高校生同士が交流するような教室配置を選択したいと思えます。1階には**キャンパスストリート(以後C.S.)**と呼ばれる「みち」空間が各専門教室を繋ぎます。学校の中にいわば商店街がある感じです。「**地域交流ゾーン**」では地元カフェや物産販売など、新校ならではのプログラムがまちに開かれています。2階では各教室を**フレキシブルラーニングエリア(以後FLA)**が繋ぐことで、教室の外との効果的な活用を促します。授業は難しくとも、毎日の学校生活が楽しくなる、そんな学校を目指します。

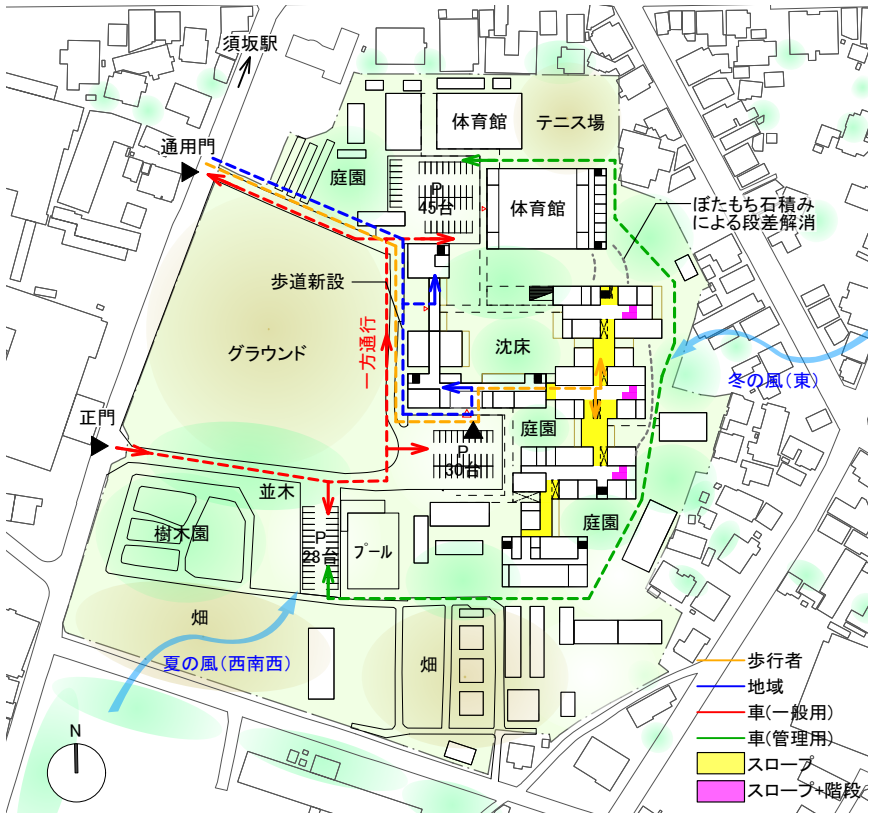
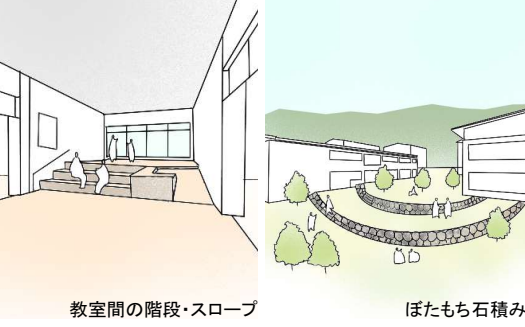


時間割 (参照:実施要領-資料5 想定時間割)

時間	普通科	商業科	工業科	農業科
1	HR	特別教室	特別教室	特別教室
2	特別教室	特別教室	特別教室	特別教室
3	特別教室	特別教室	特別教室	特別教室
4	特別教室	特別教室	特別教室	特別教室
5	特別教室	特別教室	特別教室	特別教室
6	特別教室	特別教室	特別教室	特別教室

・ランドスケープと一体化した須坂新校

須坂の中心市街地には蔵町の再生事業で少しずつ、景観としての街並み保存が進んできました。須坂新校にも様々なレベル差の中に多様な樹木や手入れの行き届いた庭が広がり、歩く者の目を楽しませてくれます。しかしながら、現在の状況は庭が分断されており、全体像が見えません。そこで私たちは、中央にある「沈床」を中心に、学校全体が一つの**キャンパス**、ととらえられるような校舎配置とランドスケープデザインを試みたいと思います。これはかつて園芸高校であったところからの時間が育んできた風景でもあり、自然の姿であり、須坂新校の最も誇るべきシンボルであると思います。



中野総合学科新校（仮称）の施設整備について

R6.4.30 現在
高校教育課・高校再編推進室

施設整備に関する概ねの工程は、次のとおりと考えられます。

1 施設整備の基本コンセプトについて

県立高校施設の著しい老朽化と社会や学びの変化に対応し、NSDの考え方やZEB化等による新しい時代にふさわしい学校施設への転換を図り、質的向上の実現を目指していきます。

(NSD…長野県スクールデザインの略、ZEB…Net Zero Energy Buildingの略)

2 施設整備のポイントについて

○新校の開校に向けた所要施設（校舎等）の整備等については、従来の標準的な校舎整備によらず、新たな視点を加えて進めていきます。

《新たな視点》

・ZEB化の推進

自然環境を最大限活かす建築的工夫、設備の省エネルギー化+創エネルギー など

・学習空間デザイン・面的整備

施設全体を考え、探究的な学びに対応した使いやすい学習空間を創出 など

3 中野総合学科新校の施設整備に係る概ねの工程について

(1) 統合に係る県議会の同意



(2) 設計関連業務（予算措置を県議会で議決）

①NSDによる施設整備基本計画の策定

・プロポーザル方式で事業者を選定

・新校の学校施設（学習空間デザイン等）の全体構想を策定

②整備する施設の基本設計

③整備する施設の実施設計

設計関連業務
(①～③)の
所要期間は、
概ね3年程度



(3) 工事関連業務（予算措置を県議会で議決）

①施工業者との契約まで概ね半年程度（県議会で議決）

②契約後の工事期間は、上記基本計画の中で検討する。

（第一期再編校の例によると、概ね3年以上見込まれる）

新校舎の工事完了まで、概ね3年程度は必要

地域共学共創コンソーシアムについて

○第4回特色ある県立高校づくり懇談会資料（抜粋）

長野県教育委員会ホーム > 学校教育 > 特色ある県立高校づくり懇談会

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/koko/tokushoku/top.html>



特色ある県立高校づくり懇談会について

生徒や地域の期待に応える県立高校のさらなる魅力づくり等を進めるため、有識者や様々な分野で活躍される方々から幅広く意見などを求め、そのご意見等を新たな学びや学校づくりに反映することを目的に全5回開催（R5年度）

第1回テーマ「これまでの高校とこれからの高校」（R5. 6. 5）

第2回テーマ「県立高校の入口出口」（R5. 8. 9）

第3回テーマ「特色化、魅力化について①」（R5. 11. 15）

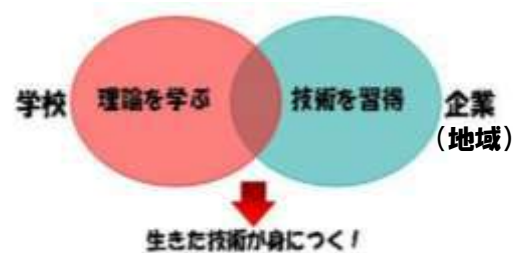
第4回テーマ「特色化、魅力化について②」（R6. 1. 12）

第5回テーマ「これまでに出された主な意見と県教育委員会の考え方について」（R6. 3. 15）

高校におけるデュアルシステムについて

1 概要

高校におけるデュアル（2つの）システムとは、学校と企業（地域）が協力して生徒を育成する職業教育である。3日間前後で実施するインターンシップよりも長期にわたり就業体験を行う中で、学習をより深めるとともに、企業が必要とする実践的な技能・技術を身に付けたり、職業観や社会観といった職業人としての資質を磨くことができる。



2 県内での取組事例（6校の実践）

○池田工業高等学校 平成 18 年～（18 年目）

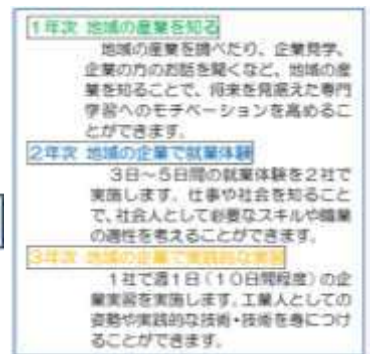
機械・電気学科、建築学科（3年希望生徒が実施）
科目「課題研究」にて単位認定
週1日（年25日間程度）

造業、建設業、農協、社会福祉協議会などの現場で、実践的な技術を身に付けることができる

- ・高齢者用電動・手動カートの設計・製作
- ・池工版デュアルシステム発電所（水車による小水力発電、高校による水利権取得）
- ・安曇野ちひろ美術館内の机や椅子の製作
- ・農業用機械の修理・メンテナンス
- ・福祉に関する実体験、高齢者との交流 等

○須坂創成高等学校 平成 27 年～（9 年目）

創造工学科（全生徒が実施）
3年時に学校設定科目「企業実習」にて単位認定
週1日（10日間程度）



○軽井沢高等学校 平成 28 年～（8 年目）

普通科（3年次選択科目にて希望生徒が実施）
学校設定科目「デュアル」にて単位認定
週1日（年15日間程度）

○白馬高等学校 令和元年～（5 年目）

国際観光科（3年次選択科目にて希望生徒が実施）
学校設定科目「観光 I」の増加単位にて単位認定
土日、長期休業中（年9日間程度）

○小諸商業高等学校 令和 2 年～（4 年目）

商業科、会計システム科（3年希望生徒が実施）
科目「課題研究」の一部として単位認定
週1日（年15日間程度）

○茅野高等学校 令和 5 年～（1 年目）

普通科（2年生全員実施）
「総合的な探究の時間」にて単位認定
週1日（年22日間程度）

3 デュアルシステムの効果及び課題

<効果>

- 実際に企業で、より実践的な技術・技能を身に付けることができる。
- 社会人（職業人）としての意識をリアルに学ぶことができる。
- 自分の適性を自覚し、進路決定に役立てることができる。（支援企業に就職する例もある。）

<課題>

- 企業側の負担の問題。（材料や消耗品等の費用面、社員が生徒を指導する際の準備等）
- 生徒が実習に参加してからのミスマッチの修正
- 進学（専門学科以外）を希望する生徒に対する指導（モチベーション等）

高大連携について

1 概要

高大連携とは高等学校と大学とが連携する取組のことである。高校生が大学の授業を受ける、大学の教員が高校で出前授業を行うといった、高校生が大学レベルの教育・研究に触れる機会を増やしたり、高校と大学の教員同士が交流し、ネットワークを構築したりすること等を目指す。

2 県内の状況

(1) 各校の連携の状況（令和5年度学校経営概要による）

項目	全日制 79 校		定時制・通信制 23 校	
	校	%	校	%
① 連携協定を結んでいる	34	43.0%	5	21.7%
② 教科・総合的な探究の時間	30	38.0%	2	8.7%
③ 特別活動（学校行事・生徒会活動等）	7	8.9%	1	4.3%
④ 部活動	6	7.6%		
⑤ その他	7	8.9%		

※令和5年9月本課調査によると、信州大学と連携を実施している高校数は44校（53.7%、回答数80校82課程中）となっている。

(2) 信州大学「長野県内高校生による科目等履修生（先取り履修生）」

信州大学では、令和4年度後期より、信州大学への進学を視野に入れている高校生に対して、大学の授業科目を履修する機会を提供している。学びの複線化・多様化を高めるとともに、信州大学に対する理解を深めることを目的としている。

（参考1）履修生徒数（のべ数）

- ・令和4年度後期13名、令和5年度前期29名、令和5年度後期13名。
- ・修得した単位は、信州大学入学後の卒業に必要な単位として有効。
- ・それとは別に「学校外における学修」として卒業単位に加えている高校もある。（上田高校）

（参考2）令和5年度後期の開設講座（9講座）

古典文学史Ⅰ、古典文学史Ⅱ、素朴な集合論ゼミ、集合論、繊維化学の基礎、STEAMものづくり入門ⅠB、ATEAMものづくり入門ⅡB、マイクロ経済学入門
データサイエンスリテラシー

3 県内の事例

	屋代高校	長野工業高校
実施内容	大学や研究機関等と連携し魅力的なカリキュラムを開発。 ・大学や企業と連携した課題研究 ・大学や企業による先進的な連携授業	信州大学工学部の研究室体験等を通し、大学の高度な先端技術研究に触れる。
期待される効果	課題発見能力、協働して問題解決にあたる能力等の向上。	思考力や想像力、実践力や技術力の向上。

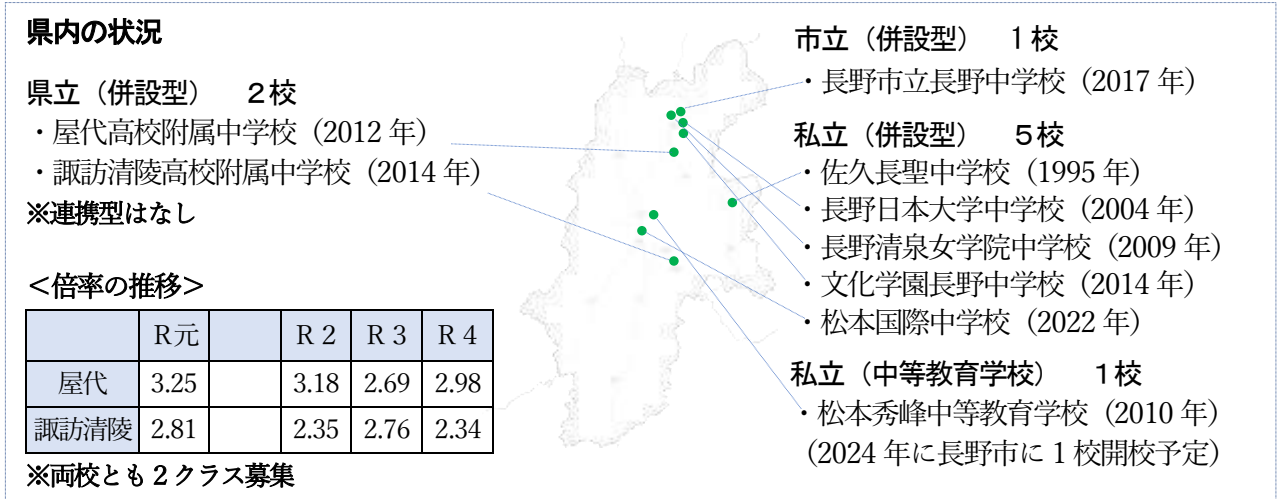
中高一貫校について

1 概要

中高一貫校とは、従来の中学校・高等学校制度に加えて、6年間の一貫した教育課程や学習環境の下で学ぶ機会を選択できるようにすることで、教育の多様化を推進し、生徒一人ひとりの個性をより重視する教育を目指す学校のこと。以下の3種類がある。

中等教育学校	中学校と高等学校の課程を統合し、一つの学校として、一体的に教育を行う。
併設型	同一の設置者が中学校と高等学校を接続した教育を行う。高校選抜は行わない。
連携型	市町村と都道府県など、設置者が異なる中学校と高等学校が、教育課程の編成や教員・生徒間交流等について連携して教育を行う。

2 県内の状況・全国との比較 (R4)



全国の状況（都道府県立中高一貫校）

<設置数>

	併設型	連携型	合計
全国の平均	1.9	1.6	3.6
長野県	2	0	2

<上位の自治体>R4

	併設型	連携型
割合1位の県	和歌山県 13.9%（5校）	福井県 12.0%（3校）
長野県	2.5%（2校）	0%（0校）

3 中高一貫校（併設型）の成果と課題（「第1期長野県高等学校再編計画まとめと課題の整理」より）

(1) 成果

- ・広域から期待が寄せられる学校として定着
- ・6年間の計画的・継続的な学習活動・探究活動が効果的に展開
- ・異年齢集団の継続的な特別活動等により社会性や豊かな人間性が育成
- ・教員の相互乗り入れによる教育現場の活性化が期待

(2) 課題

- ・生徒育成ビジョンのより一層の充実が必要
- ・カリキュラム等の研究を深め県民の期待に応えることが必要
- ・クラス・講座編成について研究を進めることが必要
- ・生徒が心身ともに充実した生活を送れるよう丁寧な対応が必要
- ・県立中学校へ進学する目的をより明確にすることが必要
- ・教員の多忙化や地域との関わりについての検討が必要

4 県教育委員会の考え方（「第1期長野県高等学校再編計画まとめと課題の整理」より）

少子化に歯止めがかからず市町村立小中学校の統廃合が進められる中にあることは、新たな県立中学校を設置することの影響は大きい。現在、県立2校のモデル校で、ある程度の広域から生徒を集め、県民の認知の深まりとともに志願状況等が落ち着いてきていること、また、モデル校を設置した以降にも市立・私立の併設型中高一貫校が設置されている状況にあるため、モデル校と同じ併設型の県立中高一貫校については、現行の2校体制を維持することが適切であると考えられる。

(補足：文部科学省HPより抜粋)

1 中高一貫教育校での特例措置

	中等教育学校・併設型	連携型
○中等教育学校前期 ○中学校	<ul style="list-style-type: none"> 各学年において各教科の授業時数を70単位時間の範囲内で減じ、当該教科の内容を代替できる内容の選択教科の授業時数に充てることができる。ただし、各学年において、各教科の授業時数から減ずる授業時数は、一教科当たり35単位時間までが限度となっている。 各教科の内容のうち特定の学年において指導することとされているものの一部を他の学年における指導の内容に移行することができる。この場合においては、当該特定の学年において移行した指導の内容について再度指導しないことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各学年において各教科の授業時数を70単位時間の範囲内で減じ、当該教科の内容を代替できる内容の選択教科の授業時数に充てることができる。ただし、各学年において、各教科の授業時数から減ずる授業時数は、一教科当たり35単位時間までが限度となっている。
○中等教育学校前期 ○中学校 ↓ ○中等教育学校後期 ○高校	<ul style="list-style-type: none"> 指導の内容については、各教科や各教科に属する科目の内容のうち相互に関連するものの一部を代替して指導することができる。 中等教育学校前期課程及び併設型中学校における指導の内容の一部を中等教育学校後期課程及び併設型高等学校における指導の内容に移行して指導することができる。 中等教育学校後期課程及び併設型高等学校における指導内容の一部については、中等教育学校前期課程及び併設型中学校における指導の内容に移行して指導することができる。この場合においては、中等教育学校後期課程及び併設型高等学校において、当該移行した指導の内容について再度指導しないことができる。 	
○中等教育学校後期 ○高校	<ul style="list-style-type: none"> 普通科における学校設定教科・科目について、卒業に必要な修得単位数に含めることができる単位数の上限を20単位から36単位に拡大することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 普通科における学校設定教科・科目について、卒業に必要な修得単位数に含めることができる単位数の上限を20単位から36単位に拡大することができる。

2 中高一貫教育校での入学者選抜

	併設型中高一貫教育校	連携型中高一貫教育校
○入学者選抜	<ul style="list-style-type: none"> 行わない 	<ul style="list-style-type: none"> 調査書及び学力検査の成績以外の資料により行うことができる

高校におけるインクルーシブな教育の充実について

1 概要

インクルーシブな教育とは、障がいのある生徒と障がいのない生徒が同じ場で共に学ぶことにより、互いに多様性を認め合いながら、共生社会の形成を目指す教育。

本県では、中学校特別支援学級から高校に進学する割合が約 8 割になっており、全国的にかなり高い。また、全ての高校に発達障がいの診断を受けている生徒が在籍している状況。

各高校における特別支援教育を充実する取組と特別な教育的支援が必要な生徒への通級指導教室の設置や、多様性の理解が進むように高校内に特別支援学校高等部分教室を設置する取組を行っている。

2 県内の高校の状況

(1) 各高校における特別支援教育を充実する取組

	取組み
高校入試における対応	<ul style="list-style-type: none"> ・「高校入試における合理的配慮のフロー」を作成し、全ての中学校、高校に配付。 ・通知文「障がい等のある生徒の公立高等学校への進学にあたって」を毎年、高校から全ての中学校、特別支援学校に送付し、周知徹底を依頼。
特別支援教育に係る支援力の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・全高校で特別支援教育コーディネーターを指名し、校内支援委員会等を設置。 ・特別支援学校に、高校巡回支援担当教員を各ブロック(東北中南信)に 1 名ずつ計 4 名配置し、高校の巡回支援を実施。 ・各校で「発達障がい支援力アップ」出前研修を実施し、教職員の支援力を向上。
多様な教育的ニーズに応じる仕組みの整備	<ul style="list-style-type: none"> ・特別な支援が必要な生徒について、中学校からの「プレ支援シート」、「個別の指導計画」及び「個別の教育支援計画」等を活用した支援情報の確実な引き継ぎ。
卒業後を見据えた地域の多様な支援機関との連携強化	<ul style="list-style-type: none"> ・地区別協議会等において、各圏域の相談支援機関、市町村福祉担当課等と高校を支える支援ネットワークを構築し、卒業後の自立に向けた連携を推進。

(2) 障がいのある生徒もない生徒も共に学び多様性の理解を深めるための取組

通級指導教室 ※ 1	<ul style="list-style-type: none"> ■設置校：3 校 (自校通級) 東御清翔・箕輪進修・松本筑摩 ■指導人数：25 人 (R5)
特別支援学校 高等部分教室 ※ 2	<ul style="list-style-type: none"> ■高等学校に併設：5 校 更級農業・佐久平総合技術 (白田)・上伊那農業・南安曇農業・須坂創成 ■盲学校に併設：2 校 長野盲・松本盲 ■各校学年 1 クラス (定員 8 人)

※ 1 大部分の授業を通常の学級で受けながら、一部の授業について、障害に応じた指導を特別な場(通級指導教室)で受ける指導形態。

※ 2 特別支援学校の生徒が、地域や設置校と連携し、設置校の生徒と交流や共同学習を行いながら、社会的自立、職業的自立を目指すために設置。

3 通級指導教室、特別支援学校高等部分教室の具体的な事例

【通級指導教室：箕輪進修高校】

設置状況	<ul style="list-style-type: none"> ・令和元年度設置、 ・R5 年度は、2 年生 4 人、3 年生 3 人の計 7 人利用
取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・週 2 時間、選択科目「グロウアップ (自立活動)」として教育的ニーズに応じた授業を実施 ・個別指導計画、個別教育支援計画を作成

【特別支援学校高等部分教室：安曇野養護学校あづみ野分教室】

設置状況	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 22 年度開設、各学年 1 クラス (定員 8 人) ・R5 年度は、1 年生 8 人、2 年生 6 人、3 年生 8 人の計 22 人在籍
取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・南農グリーンサイエンス科フルーツコースとリンゴやぶどうの栽培方法を共同学習 ・南農祭 (文化祭) に参加。対面式、避難訓練合同実施

学校と社会をつなぐ連携コーディネーターについて

1 概要

- ・生徒自らが問いを立て、多様な他者と協働して課題に取り組めるような学びの環境を整備するためには、学校内で学びを完結させるのではなく、学校を積極的に開き、社会とつながっていく仕掛けが必要である。その中心的な役割をもち、専門的に実践するのが連携コーディネーターである。
- ・社会と連携した学びの効果として
 - ①個々の生徒のニーズに応じた探究学習のフィールドが広がり、学びがより深まる
 - ②魅力的な大人に出会う機会が増加する
 - ③地域の人々や産業界と連携を強めることで、地域の良さを確認し、卒業後も地元に貢献したいと考える若者が増える などが挙げられる。

【背景】

- ・「新学習指導要領」：地域の企業等との協働を前提とした探究学習の要請
- ・「第4次長野県教育振興基本計画」：個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実 “一人ひとりが主体的に学び他者と協働する学校をつくる” 等を位置付け

2 県内の状況

- ・R5年度、県内2校に連携コーディネーターをモデル的に先行配置するとともに、検討ワーキンググループを設置し、コーディネーターのあり方等を議論。
- ・具体的な内容

	池田工業高校	野沢北高校
業務内容	企業訪問・インターンシップ受入調整、職業研修の実施 等	探究活動支援、外部サポーターの発掘、コンソーシアムの立ち上げ 等
実績・効果	・就職でのミスマッチ解消 ・地域と学校の一層の繋がり	・生徒の問題発見能力の向上 ・教員や生徒への地域資源の提供

3 連携コーディネーターの役割とその効果

- ・異動がある教員ではなく、各校のニーズに応じた連携コーディネーターを配置することで、各地域の特色を活かした持続可能な教育活動が行える。
- ・地域資源（人・もの・課題等）を掘り起こすことで、生徒は探究的な学びをより自分の課題として実践的に深めることができる。
- ・学校の魅力・特色を中学校や地域に常時発信したり、説明会を開催したりするなど、学校への理解を深める機会を増やすことで、入学希望者が増えることが期待できる。

4 配置にあたっての課題

- ・業務内容が曖昧とまらないための、連携コーディネーターの配置目的や役割の明確化
- ・研修会実施などによる連携コーディネーターの質の担保と向上、適任者の確保

中野総合学科新校統合方法について

○年次統合

全日制		R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	
中野西	R7入学	3年			令和12年4月募集停止				
	R8入学	2年	3年						
	R9入学	1年	2年	3年					
	R10入学		1年	2年					3年
	R11入学			1年					2年
立志館	R7入学	3年			令和12年4月募集停止				
	R8入学	2年	3年						
	R9入学	1年	2年	3年					
	R10入学		1年	2年					3年
	R11入学			1年					2年
新校	R12入学		令和12年4月開校		1年	2年	3年		
	R13入学					1年	2年	3年	
	R14入学						1年	2年	
	R15入学							1年	

定時制		R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15		
立志館	R6入学	4年			令和12年4月募集停止					
	R7入学	3年	4年							
	R8入学	2年	3年	4年						
	R9入学	1年	2年	3年					4年	
	R10入学		1年	2年					3年	4年
	R11入学			1年					2年	3年
新校	R12入学		令和12年4月開校		1年	2年	3年	4年		
	R13入学					1年	2年	3年		
	R14入学						1年	2年		
	R15入学							1年		

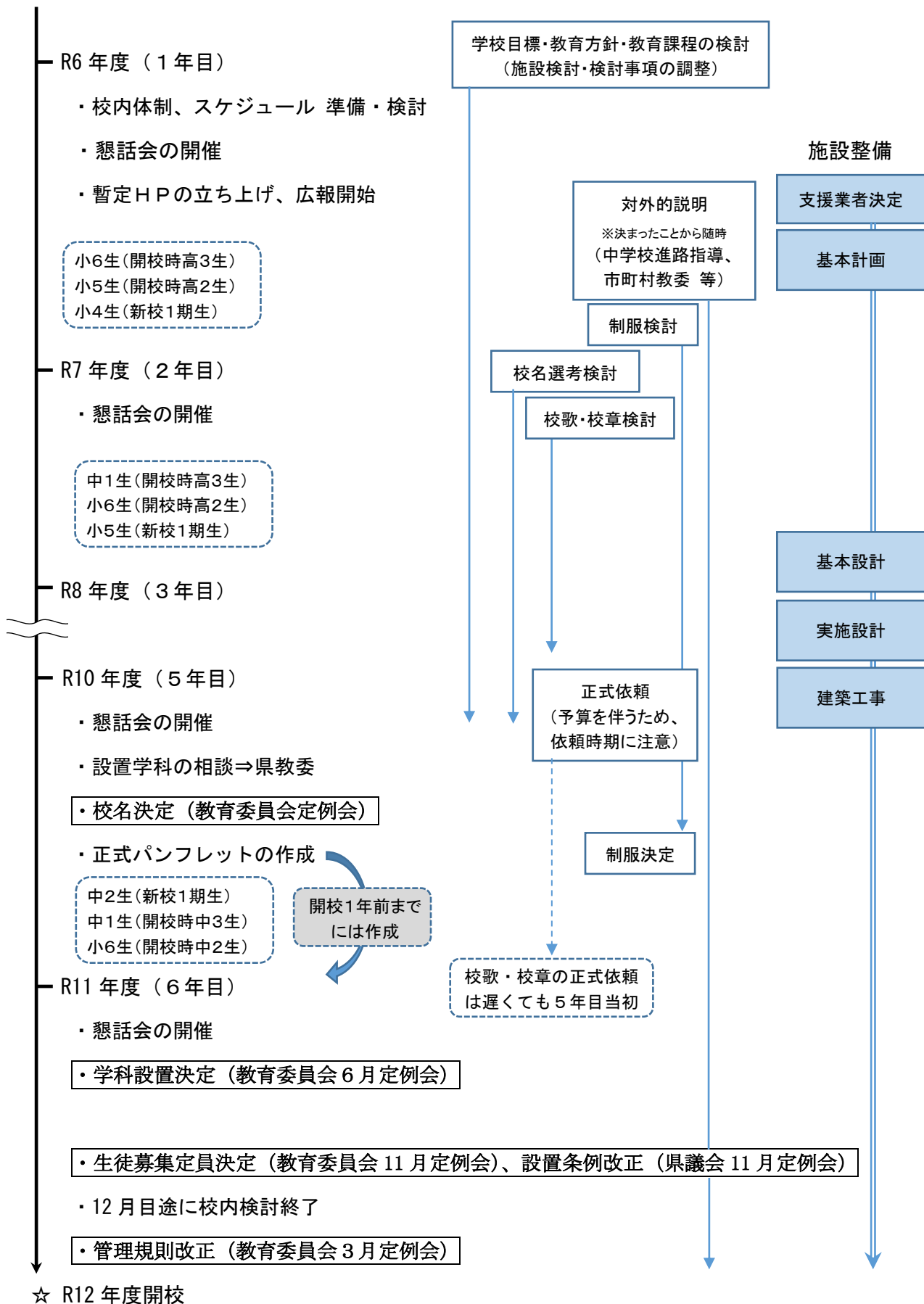
○一斉統合

全日制		R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	
中野西	R7入学	3年			統合完了				
	R8入学	2年	3年						
	R9入学	1年	2年	3年					
	R10入学		1年	2年					転校
	R11入学			1年					
立志館	R7入学	3年			令和12年4月募集停止				
	R8入学	2年	3年						
	R9入学	1年	2年	3年					
	R10入学		1年	2年					転校
	R11入学			1年					
新校	R10入学				3年				
					3年				
	R11入学				2年	3年			
					2年	3年			
	R12入学		令和12年4月開校		1年	2年	3年		
	R13入学					1年	2年	3年	
	R14入学						1年	2年	
R15入学							1年		

定時制		R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	
立志館	R6入学	4年			令和12年4月募集停止				
	R7入学	3年	4年						
	R8入学	2年	3年	4年					
	R9入学	1年	2年	3年					転校
	R10入学		1年	2年					
	R11入学			1年					
新校	R9入学				4年				
	R10入学				3年	4年			
	R11入学				2年	3年	4年		
	R12入学		令和12年4月開校		1年	2年	3年	4年	
	R13入学					1年	2年	3年	
	R14入学						1年	2年	
R15入学							1年		

○議会同意後の大まかなスケジュール例

☆議会同意



中野総合学科新校の開校までのロードマップ（イメージ図）

